

血潮と糠

野村胡堂

—

「親分、面白い話がありますぜ」

ガラッ八の八五郎、銭形平次親分の家へ^{どな}吠鳴り込みました。

「相変らず騒々しいな、横町の万年娘が、駈落したって話なら知っているよ」

銭形の平次は、恋女房のお静に顔を当らせながら、満身に秋の陽を浴びて、うつらうつらとやっているところだったのです。

「へッ、そんなつまらない話じゃねえ。——ところでお静さん、——いや姐御^{あねご}って言うんだっけ——、親分の顔を^{あた}剃るのはよいが、右から左からいい男^{おとこ}の振りを眺めてばかりいちゃ、^そ剃り上げないうちに、後から後から^{はえそろ}生揃って来ますぜ、へッへッへッ」

「まア、何んという口の悪い八五郎さんだろう」

お静は真^まっ赧^かになって俯向^{うつむ}きました。赤い手絡、赤い^{たすき}襷、白い二の腕^{のぞ}を覗^{のぞ}かせて、^{かみそり}剃刀の扱いようも思いの外器用^{けいよう}そうです。

「八、からかっちゃいけねえ。そうでなくてせえ、危^{あや}かしくて、冷々^{ひやひや}しているんだ」

「まア」

とお静。

「先刻も、止せばいいのに自分で襟^{あて}を剃^かって、少し剃刀を滑^ならしたんだ」

「自分の粗相^{そそう}にしても、姐御^{あねご}の頸筋^{くびすじ}へ傷^{きず}を付けるのは虐^{むご}たらしいねえ」

「その血染^{ちま}の剃刀^{かみそり}で俺^{おれ}の髭^{ひげ}を当^あっているんだから、一つ間違^{まちが}って手^てが滑^なると夫婦心^{ふうふこころ}中^なだ、ハッ、ハッ、ハッ」

平次はそんな気楽^{きらく}なことを言ってカラカラと笑^{わら}っております。

「まア」

お静は又^{また}赧^かくなりました。

「だがね、親分、仲^なのいい夫婦だからいいようなものの、他人^{たにん}同士^{どうし}じゃ血^ちと血^ちが刃物^{やいば}の上^{うへ}で交^まるのは縁起^{えんぎ}が悪いと言^いいますぜ」

「そんな事^{こと}を担^かぐ人もあるだろうよ。第一^{だいいち}血染^{ちま}めの剃刀^{かみそり}で当^あられちゃ気味^{きみ}が良くないやネ、——ところで八、手前^{てまえ}が触^ふれ込んで来^きた面白^{おもしろ}い話^わってえのは何^{なに}だい」

平次は職業意職に返りました。剃^{あた}った後で顔を洗って、綺麗に拭き取ると、煙管^{きせる}を伸ばして、縁側の日向へ煙草盆を引寄せます。

「あッ、忘れていた」

ガラッ八は自分の掌^てでピシリと頬を叩きました。人間は少し甘い^かが、不思議にいい耳を持ったガラッ八は、平次^かに取っては申分のない見る目嗅ぐ鼻だったのです。

「忘れるようじゃ、どうせたいした話じゃあるまい」

と平次。

「ところが大変^{の た じに}なんで。野垂れ死をした若い物貰いが、百両持っていたんだから驚くでしょう。自慢^{すが}じゃないがこちとらは、人様の袖に縫ったおぼえはないが、どうかすると百文も持っていねえことがある」

「自分に引くらべる奴があるかい、——だが、筋は面白^{くわ}そうだね、もう少し詳しく話してみるがいい」

平次も少し乗出しました。

「たったそれっきりの話さ、種も仕掛もねえところがこの話の取柄で」

「種も仕掛もねえことがあるものか、貰い溜めたにしても百両は大金だ。五年や十年で溜まるわけがねえ、——今お前^{めえ}、若い物貰いと言ったろう」

「なあーる、恐れ入ったね、さすがに銭形の親分だ。若い乞食が百両溜めるわけはねえとは理窟^{りくつ}だね」

「感心していちゃいけねえ、その百両は小粒か、小判か、それとも証文か」

「それが小判^{こも}なんで、封も切らずに二十五両包が四つ、外に貰い溜めらしい銭が二三百ありましたぜ」

「何？ 小判で百両？ それ^{あだうち}が種も仕掛もない話かえ。大泥棒が仇討じゃあるまいし、お菰^{こも}が小判で百両持っているわけがあるもんか」

「成程^{あみがさこじき}そう言えばその通りだ、——親分も知っていなさるでしょう、観音様の裏にいる編笠乞食」

「ウム」

「業病^{ごうびょう}に取っ付かれて、人に顔をさらさないが、物貰いにしちゃ色の白い、何となく身体に品のある若いのがいましたろう」

「それが死んだのかい」

「道端に坐って、朝から晩までお経きょうを読んでいたのが、何か食べ物でも悪かったか、今日の昼頃のた打ち廻くまって死んでしまったそうです。誰も構い手がねえから、まだ菰こもをかけてありますよ——先刻町役人立ち合くせいで調べて見ると、胴巻から二十五両包が四つ飛出しゃがった。百両も持ってる癖くせに、何だってまた物貰いの真似をしゃがるんでしょう、罰ばちの当たった野郎じゃありませんか」

「そいつは日いわくがありそうだ、もう一度行ってみる気はないか」

「行きますとも、親分と一緒になら」

ガラッ八は飛上がりました。最上等りょうけんの獵犬のように、鼻さえもヒクヒクさせております。

二

神田から浅草へ、近い道ではありませんが、悠長ゆうちょうな時代で、平次が行き着くまで、行倒ゆきだおれの死骸はまだ取捨てる段取にもならず、町内の番太が、迷惑めいわくそうな顔をしながら、寄って来る弥次馬を追っ払っておりました。

「これは銭形の親分、——高が物貰しろものいの行倒れで、御手に掛けるような代物じゃ御座いませんよ」

「どうせそうだろうが、商売冥利しょうばいみょうりにちよいと見て行こう——小判で百両も持っていたっていうじゃないか」

「へエ——、大層溜めやがったもので、番太で駄菓子だかしを売るよりは、余っ程歩がいいと見えますよ、へっへっへっ、——金は町内の旦那方が預たくわってありますが、何なら——」

「いやそれには及ばない、小判は物貰まばらいの懐から出ても小判に間違いあるまい」

平次はそう言いながら、往来の人の疎まばらになったところを狙って、ヒョいと菰こもを捲り上げました。

中には古綿をつくねたような、見る影もない乞食くもんの死骸——と思うと大違ちがい、苦悶くもんに歪ゆがんで、妙に怪奇な身体の恰好かっこうになっておりますが、年の頃二十五六の、何となく美男という感じのする男の死体です。

それに、病気のせいもあったでしょうが、乞食にしては色も白く、業病業病といっ

でも、ところどころ不気味な斑紋はんもんはありますが、それも大したこともなく、見た感じは、それほど醜みにくくもなっておりません。

唯ただ平次が驚いたのは、死骸は素人の眼にも異常で、毒死どくしの跡がはっきり判ることだったのです。平次も日頃『検屍弁疑けんしべんぎ』位は読んでおりますが、その中の毒死いくこうの幾項かは、この死骸にはっきり現れているような気がするのです。

「医者いしやに立ち合あって貰もらったかい、爺とっさん」

「いえ、それどころじゃありません、旦那方は秋祭りの支度で眼が廻る騒さわぎで——」
番太おやじの親爺は心得たことを言います。

「八、検屍のやり直しというわけにも行くまいが、町役人にそう言って、念のため町内の本道を連れて来てくれ。道端の物貰いに毒を飲ませて、懐中の百両を盗らずに行くなんかは、少しおかしいよ」

「よし来たッ、町役人が文句を言ったら八丁堀まで飛んで行って、笹野の旦那に江戸一番という医者いしやを連れて来て貰もらおうか」

「馬鹿だなア、八丁堀まで行っちゃ日が暮れるじゃないか、丁寧に頼むんだぞ」

「心得てるよ、親分」

ガラッ八は横っ飛びにスッ飛んで行きましたが、どう話をつけたものか、間もなく町役人と坊主頭の医者いしやを一人、手を引張ひるようにして連れて来たものです。

医者いしやは屍体の眼を見、唇を見、爪つめを見、それから全身を調べて、薬箱から取出した銀かんざしの簪、それを何やら薬液やくえきに浸して屍体の口に入れ、暫くして取出して、水で洗すすって、

「フーム」

と眺めております。

「毒は何でしょう」

「そこまでは判らないが、毒を飲のまされて死んだ事に間違いはない、この通り」

医者いしやの差出ざしした銀簪かんざしを見ると、成程その先が青黒く色変りがしております。

「死んだ後で口の中へ毒を入れたのじゃありませんね」

「そんな事はない。爪つめの色、眼瞼まぶたの中がまるで違う」

「有難う、飛んだ手数をかけました」

平次は丁寧に医者いしやを送り返しました。

「親分、大変なことになったね」

ガラッ八は妙な行掛りに、すっかり面喰っております。

「八、この男の身許みもとを洗ってくれ、生れながらの物貰いじゃあるめえ」

「そんな事なら訳はありません」

ガラッ八は足を宙に飛んで行きます。

三

「親分、大縮尻おおしくじりさ。こんなヒドい目に逢ったことはねえ」

ガラッ八が帰って来たのは、それから一刻ばかり経った時分、四方はすっかり暗くなって乞食の死骸も取片付けてしまってからでした。

「解らないのか」

番太の小屋でガラッ八の帰りを待っていた平次さいさき、幸先が悪いと見たか、やおら立上がつて、煙草入を腰に落します。

「小屋頭こやがしらを尋ねて、編笠乞食あみがさこじきの身許きを訊いたが、どうしても言わねえ。堅気かたの方が身を落したのは仲間の定法で元の名前は申上げられません。どうせ、こうなった身体だから、そんな事はどうでもいいじゃ御座いませんか。それに、あの編笠野郎は、余程しさい深い仔細しさいがあると見えて、自分からも言いません——とこう吐ぬかしゃあがる」

「フム」

「その代り遺骸なきがらはこっちで引取り、回向万端手落なく致させます——てやがる。お貰いの仲間にも、坊主も穴掘りもいるんだってネ、親分」

「そんな事はどうでもいい、が、変死人と解っても、身許が解らなきゃア、何にもならない」

「ところが、親分、面白い話を聞込みましたぜ」

ガラッ八は、例のキナ臭いような鼻をしました。これは何か嗅ぎ出した時の表情です。

「何だ、八、物惜ものおしみをせずに、言ってしまいな」

平次も少し不機嫌です。

「あの編笠乞食のところへ、毎日一度ずつ様子を見に来る娘があるんだってネ」

「何？ 誰がそんな事を言った」

「^{すじむこ}筋向うの駄菓子屋の婆アがそう言っていましたよ。初めのうちは気が付かなかったが、近頃は毎日食べ物を持って来てやるから、ツイ顔を見る気になりましたって、——とんだ綺麗な娘だって言いますよ」

ガラッ八は到頭大変な事を嗅ぎ出して来ました。

もっとも、こんな騒ぎが始まると、大抵の人は掛り合いを恐れて、知ってる事も黙ってしまうのが人情ですが、ガラッ八の調子が開けっ放しで、人間が如何にも^{じゃねん}邪念がなさそうなので、相手になっていると、^{した}うっかり舌を滑らしてしまうのでしょ。それがガラッ八の取柄で、銭形平次に重宝がられている原因でもあったのです。

気さくな平次は、すぐ駄菓子屋へ飛んで行きました。^そ反っくり返った箱の中から、駄菓子を二三十文選り出させて、^{ていさい}観音詣りの土産物といった体裁に包ませながら、
「お婆さん、編笠乞食のところへ来る娘さんは、ありゃ何だろうねえ、大層な^{きりょう}容貌だって評判だが——」

「親分はよく御存じで、町内にもあの娘の事を知っているのは、そうたんとはありませんよ」

駄菓子屋の婆さんの舌は、思いの外滑らかにほぐれます。^{みょうり}商売冥利、お客への世辞のつもりだったかもわかりません。

「幾つ位に見えるだろう」

「^{やく}十九そこそこ、丁度にはなりませんねえ」

「身分は何だろう。男には眼の届かないところがあるものだ、お前さんが見たら判らるだろう」

「それがね、親分、側へ寄って見たわけでも、声を掛けたわけでもありませんから、^{はつきり}判然したことは申上げられませんが、着物の好み、髪形などから見ると、^{おおだな}下町の大店のお嬢さんというところじゃ御座いませんか」

「成程、——ところで、編笠乞食との間柄は何だろう。^{きょうだい}兄妹とか、^{いいなづけ}許嫁とか、話ぶりで見当は付かなかったらうか」

「それがネ、親分、こんなに離れていちゃ、聞こうと思っても聞えやしません。裏の井戸端にいる嫁の話声はよく聞えるんですが——」

^{しゅうとこんじょう}

姑根性——と言うものでしょう、ガラッ八は危うく吹出すところでした。

「今日も何か食べ物を持って来た様子かい」

「へエ、竹の皮包にして、お寿もじか何か持って来た様子です。お昼少し前でしたよ」

「確かにそれを食ったろうね」

「娘さんの後姿を伏し拝むようにして食べてましたよ」

「で、その後で苦しみ始めたんだね」

「お鮎^{すし}を食べて小半刻も経ちましたかしら、暫くはそれでも我慢している様子でしたが、到底たまらなくなつたと見えて、地べたを這い廻るようにして苦しみ出しました。見ちゃいられませんでしたよ」

「有難う、それだけわかりゃ、大助かりだ」

平次はホツとした心持になつたのでしょう、思わず岡っ引の地を出して、こんな事を言ってしまった。

四

「八、今日は大事な仕事だ。縮尻^{しくじ}るような事があっちゃ、取り返しが付かない」

「親分脅かしっこなしに願いますよ、一体どんな野郎と噛み合やいいんで——？」

「喧嘩^つじゃないよ、あの娘の後を跟けて、どこへ納まるか見届けりゃあいいんだ」

「へエ——」

ガラッ八は眼を見張りました。よくもこう目が届いたものです、花川戸の方から入って来た娘、町一杯に見通す位置に身を潜^{ひそ}めて、路地の口から、こちらを眺めているのを平次は指しているのです。

事件の翌る日、変死した乞食の身許を洗いようがないと解ると、平次は最後の手段として、馬道に朝から張り通して今日も来るかも知れない娘を待ったのでした。

「——身に覚えがなきゃア来るに決っている。覚えがあっても、下手人は後の様子を見たがるから、きっと来る——」

そんな事を言っ、半日路地に立った平次とガラッ八は、昼少し前^{ようや}漸く^{むく}酬いられて、目差す娘が白日の下に現われたのを見つけたのでした。

「綺麗だね、親分、あれを跟けるのは朝飯前だが、あんなに綺麗じゃ跟ける方で気がさす」

「何をつまらない、——それ、^{あきら}諦めて帰って行くだらう。^{さと}覺られちゃ打ちこわしだ、そっと跟けて行け」

「合点、これも^{やくとく}役得さ。同じ跟けるなら、綺麗な新造の方がどんなに心持がいいか判らない」

八五郎は駆け出しました、が、思い直した様子で立止ると、裾を七三に端折って、手拭でヒョイと顔を包んだものです。ポカポカする^{あきびより}秋日和、頬冠りは少し^{うっとり}鬱陶しいが、場所柄だけに、少し遅い朝帰りと思えば大して^お可笑しくはありません。

「錢形の」

不意に平次の肩を叩いた者があります。

「あ、^{みのわ}三輪の親分」

振り返ると、ニヤリニヤリと四十男が、平次の顔と、駆けて行くガラッ八の後姿を半々に眺めております。

三輪の万七という顔のいい御用聞、石原の利助が隠居してからは、錢形の平次を向うに廻して、事毎に手柄を争っている男だったのです。

「大層な手柄だってネ、^{ゆきだおれ}行倒の乞食の懐から小判で百両出たという話には驚かないが、その行倒れを毒死と睨んだ平次親分の目には恐れ入ったよ、——ここは馬道だから、筋を言や俺の縄張りだが、そんなケチな事は言わねえ、まア、折角やんなさるがいい。あの乞食が^{おと}大名の^{だね}落し胤だったりした日にゃ、大変な事になるぜ、ハッハッハッ」

万七はもう一つ若い平次の肩をポンと叩くと、言いたいだけの事を言ってクルリと、^{きびす}踵を返しました。

「——」

平次は眉を^{ひそ}顰めました、妙に万七の様子に自信があるので、うっかりした事が言えません。

それから^{はんとき}半刻ばかりすると、ガラッ八は^{ほこり}埃と^{あせ}汗に^{まみ}塗れて飛んで来ました。

「親分ッ」

「何というぎまだ」

「^く口^や惜しいよ」

「口惜しくたって、泣く奴があるものか、大の男が——、娘を見失ったろう」

平次に凶星を指されたのでしょう。

「見失ったんじゃないねえ。娘の後を跟けて、浅草橋御門を出るといきなり横合から飛出した野郎が、ドカンと突き当るんだ」

^{しりもち}
「尻餅をついたろう」

「尻に泥が着いているから、そんな事を言い当てたところで自慢にならねえ、——ね、親分、その突当った野郎は、あっしが起上がると胸倉を掴んで、ポカポカッと来やがるじゃないか」

^{こくもの}
一刻者のガラッ八は、すっかり腹を立てて、親分の平次にまで食ってかかりそうです。

「それがどうした、八、落着いて物をいえ、大事なところだ」

「その野郎を誰だと思いなさるんだ。親分、^{みのわ}三輪の万七の子分、^{かぐら}お神楽の清吉だろうじゃないか。——^{てめえ}手前の親分の平次は、三輪の縄張を荒らして、事毎に恥をかかせやがる。今度という今度は、^{かたき}その敵を討ってやるから、覚えていろってやがる」

「何だと八、敵を討つ？」

「清吉の野郎は確かにそういいましたよ、親分、身に覚えがありますかえ」

「馬鹿、敵の覚えなんかあってたまるものか、——それから娘はどうした」

「そんなに揉んでいるんだもの、女の足だって^{うけあ}請合い箱根の関を越す」

「つまらない事をいうな、到頭縮尻りゃがったろう」

「だって親分」

「三輪の子分なんか^{かかりあ}係合っているから悪いんだ。そんな時はな、八、後学のために言っておくが、^{なく}殴られ損にして逃げ出すんだ」

「——」

「見ろ、埃と汗と涙で、台無しじゃないか。往来の人が見て笑っているぜ」

「——」

「よくその^{なり}扮装で、浅草橋御門から駈けて来たものだ。そっちを向きな」

口小言を言いながらも、平次の眼も泣いておりました。^{よご}^{きず}汚れ傷ついて来た飼犬でもいたわるように八五郎の身体をクルリと廻して、せめてもの埃を叩いてやっております。

「親分、あっしは口惜しい」

「何をつまらねえ、——三輪の親分が、神田か日本橋で、何か嗅ぎ出したんだらう、——ところで、八、ここから浅草橋まで行くうち、娘は後ろを振り向いて見なかったか」

「後ろを振り向くどころか、横顔も見せねえ。お重詰らしい風呂敷を持って真っ直ぐに行きましたよ、あんまり後姿が綺麗だから、何遍か前へ駈け抜けて顔を拝もうとしたが——」

「馬鹿、そんな心掛けだから、お神楽の清吉なくに殴られるんじゃないか」

「親分、何とか敵を討っておくんなさい。あのお神楽の野郎、あゝしの鼻へ指を突っ込みゃがって、勘弁ならねえ野郎だ」

「ウ、フ、お前の鼻を見ると、指位突っ込みたくなるだらうよ。踵かかとでなくて仕合せだ、まア、勘弁してやれ」

「ね、親分、せめてあの娘の家だけでも判りゃア」

「その位のことならわけはないよ。三輪の万七親分か、お神楽の清吉の後を跟けていりゃア、日の暮れるまでにはきつと判る」

「有難てえ、それじゃ親分」

ガラッ八は又飛び出しました。

五

娘の素姓はすぐ判りました。

横山町の米屋——といっても、金貸の方で名高い万両分限、越後屋佐兵衛ぶげんの跡取娘あととりお絹べんてん、弁天とも小町とも、いろいろの綽名あだなで呼ばれる、界限切かいわいつての美人だったのです。

編笠あみがさ乞食こじきの素性も、それにつれて次第にはっきりしました。

越後屋の手代弥三郎と言って、二十五。主人の佐兵衛が、今から二十五年前、観音様へ朝詣りをした時、雷門かみなりもんの側に捨ててあったのを拾って、そのまま自分の子とも、奉公人ともなく育てたのでした。

佐兵衛夫婦は丁度生れたばかりの総領なを喪くして、悲歎なにくれている時だったので、そのまま総領の乳母を留め置いて弥三郎を育てました。間もなく、姪めいのお絹を

貰って、跡取娘ということにしたのです。

二人は負けず劣らず美しく可愛らしく育ちました。弥三郎は素姓も判らぬ拾い子ですが、維盛様のような美男、お絹とは似合いの夫婦雛を見るようで、主人の佐兵衛も妙に許したような眼で見、二人の間柄も、淡い友愛から、次第に濃い恋へと変わって行くのが、店の人達の眼にも、はっきり判るのでした。

そこへ主人の遠縁に当る、新助というのが割り込んで来ました。年は二十七、散々他の店で苦勞して商売にも賢く、人柄がまことに実直で、二三年の間に、すっかり弥三郎の占めていた地位を奪い、縁続きの関係があるにしても、今では番頭の茂助、支配人の民五郎に次いで、店にはなくてはならぬ人になって来たのです。

茂助は四十年も勤め上げた商売一点張の老人、支配人の民五郎は、佐兵衛の弟で、これは一と癖も二た癖もある人間、若い時は随分放埒な暮しもしたようですが、今ではすっかり堅くなって、兄の佐兵衛を助けて、家業大事に励んでおります。

弥三郎は、妙に自分の不安定な地位を考えさせられる頃から、肉体の上にも、恐ろしい変化と崩壊が始まっていたのです。

出入りの医者に診て貰って、それは、当時では癒りようのない業病と知った時の、弥三郎の驚きはどれ程だったでしょう。医者の口から漏れるともなく、この事が家中に知れ渡ると、弥三郎はもういても立ってもいられない心持になっておりました。

親無し子を拾って、これまで育ててくれた大恩を思うと、この上越後屋に踏み止って、家族に迷惑をかけることは、血をわけない間柄だけに、弥三郎には忍びないことでした。

その上、まだあまり醜くならぬうちに、お絹とも別れて、美しい記憶だけでも残そうというのが、せめてもの弥三郎の望みだったのでしょう。

全国の霊場を巡って、せめては後生を願おうといった、悲しい決心を定めると、佐兵衛の引止めるのも、お絹の歎きも振り切って、弥三郎は越後屋を飛出してしまいました。

それは三月ばかり前のこと、餞別に貰った小判の百両を懐中に深く秘め、編笠に面体を隠したまま、先ず日頃信心する観音様の近くに陣取って心静かにうろ覚えのお経を誦しながら、——せめては後世を——と悲しくも祈っているのです。

業病を遺伝と思い込んだ当時の道徳では、弥三郎の態度はまことに見上げたもの

だったに相違ありません。

ところが、野天に寝て、不味い物を食うようになってから、不思議に弥三郎の病気は癒なおって行きました。全く治ったわけではありませんが、次第に身も心も軽くなって、年内に元の身体になるかも知れないと思う未練みれんが、弥三郎を江戸から一步も踏み出させなかったのです。

お絹ひとづては人伝に弥三郎が観音様のあたりにいると聞くと、矢も楯たてもたまらず、横山町から毎日のように逢いに来ました。

頑固かたくなな弥三郎は、部屋住のお絹が持って来る金などは、どうしても受取らなかったのも、何時の間にかやら、毎日変った食物を持って来て、弥三郎が編笠かたむを傾けてそれを食うのを、お絹は遠くから眺めて涙ぐんでいるようになったのです。

そのお絹の持つて来た寿司すしで弥三郎は殺されたのです。平次はこれだけの事を探ると、深々と手を拱こまぬいて考え込みました。

六

平次は、兎に角横山町の越後屋に乗込んで行きました。今はおちぶれた弥三郎には相違ありませんが、自分の縄張り内に、人一人殺した下手人が、息を吐ついていると思うと、我慢がならなかったのです。

「あッ、銭形の親分、よくお出で下さいました。丁度今弟と相談して、お願いに上がろうというところでした」

主人の佐兵衛はよく禿はげた前額ひたいを叩くように、薄暗い奥から飛んで出ました。

「何か変ったことがありましたか」

平次も少し面喰らいます。

「三輪の万七親分がいきなりやって来て、弥三郎を毒害した覚えがあるだろう——って、娘のお絹おいと甥の新助を縛って行きました。そんな馬鹿なことがあるものですか」

佐兵衛はカンカンになって平次にまで食ってかかりそうです。

「親分、家出をして物貰いにまで身を落しているものを、何を物好きに殺す奴があるものでしょう。兄が腹を立てるのも無理じゃ御座いません」

民五郎も口を添えました。若い時分は上方から九州までも放浪して、身に余る野心を抱いたこともあります。今ではすっかり落ち着いて、兄の莫大^{ぼくだい}な身上を切り廻して、何から何まで指図をしている四十男だったのです。

「へエ——、驚きましたな。新助さんという人には逢ったことはありませんが、お嬢さんを縛るのはどうかしていますよ、私が行ってよく話してやりましょう」

「何分宜しく願います。新助だって、そんな無法なことをする人間じゃ御座いません」

佐兵衛にくれぐれも頼まれて、平次はぼんやり外に出ました。

「親分」

「何だ、ガラッ八か」

「三輪の親分が、あの綺麗な娘を縛って行ったんだってネ、罰^{ばち}の当たった野郎じゃありませんか」

「何をつまらない」

「だってそうじゃありませんか、自分が殺した覚え^{おぼ}があるものなら、翌る日も同じ時刻に、重詰^{じゅうづめ}の小風呂敷包なんか持って、馬道まで行きゃアしません」

「——」

「それに、馬道から浅草橋御門まで行くうち、あの娘が後ろを振り返って見たかって親分訊きなすったが、あれは成程^{ずほし}凶星だ、後ですっかり恐れ入ったぜ、——後ろ暗いところのある人間なら、後も振り向かずに帰るってことはない。——ひょいと、これだけの事を考えるんだから、親分の脳^{あたま}はたいしたものだ」

ガラッ八は首^{かし}を傾げたり、鼻の先を撫でたり、独りで感心しております。

「それだけ判りゃ、手前も一本だ。八丁堀へ飛んで行って、笹野の旦那にそう申上げて見るがよい。お嬢さんはその場で縄を解かれるから——」

「親分は？」

「俺は他に用事もあるから、もう一度此^こ家^この支配人に逢って見る」

「有難てえ、あっしの口一つで許される段取りになると、手もなくお嬢さんの恩人だね」

「まアそうだ」

「八五郎さん——と来たらどうしよう」

「馬鹿だね」

平次はそう言いながらも、この剽軽な男、——ガラッ八の駆けて行く後姿を見ておりました。

話は飛びますが、平次が予言した通り、八丁堀へ引いて行って、奉行所のお白洲へ突出す迄の下調したしらべをされていたお絹は、ガラッ八の弁明でその日のうちに許され、佐兵衛を呼出して、横山町の自宅へ帰しました。

「畜生、ガラッ八の野郎、つまらねえところへ出しゃ張る」

三輪の万七とお神楽の清吉はプリプリしておりますが、与力の鑑識めがねですることへ、文句の付けようもありません。

新助の方は止め置いて、二三日責めました。弥三郎さえいなければ、お絹とめあわせられて、越後屋の跡取あととりになることは、あまりにも明白な新助だったのです。

お絹が弥三郎に未練があつて、毎日浅草へ出かけるのを、新助は知らない筈もなく、知って嫉妬心やきもちごころを起さないとしたら、それは嘘になります。

「お絹さんが浅草とやらへ通うのは、店中の評判ですから、私もよく存じております。弥三郎が家出した後、私とお絹さんをめあわせるという下相談もあつた位ですから、私もお絹さんの出歩きを苦々しいとは思いましたが、それ位のことで、人一人殺そうとは思いません。第一私には、そんな恐ろしい毒薬を手に入れようがありません」

口不調法なほど実直な新助は、これだけの事を何べんも何べんも繰り返して言うだけで、それ以上に隠し事かけひきも駈引もあろうとは思えなかったのです。

「旦那、見込違いで御座いました。新助という男は、人を殺せるような性たちの人間では御座いません。あれは商売外の事は白痴ばかも同様の男で御座います」

四日目に、三輪の万七も到頭兜かぶとを脱いでしまいました。縛って来た万七が見込違いと言うのを、笹野新三郎、吟味与力ぎんみよりきでも、留めて置くほどの証拠も自信も持っていません。

七

事件はその儘うやむやに葬ほうむられそうでした。三輪の万七も間の悪さを我慢して、

ちょいちょい顔は出しますが、暫くは手の下しようもなく、平次はガラッ八に言い付けて、横山町一円に泳がせましたが、名題の早耳も、大した面白い話を聞き込んだ様子もありません。

「三輪の万七親分は、お神楽かぐらの清吉をうんと働かせて、新助の身持と、越後屋へ入るまでの奉公先を洗っていますよ」

ガラッ八はそんな事を言って来ました。

「フム」

平次の返事は一向張合がありません。

「厭が応でも、もう一度新助を縛る積りなんだね、——ところが、新助は生え抜きの米屋の手代だが、主人の弟の民五郎は、上方で薬種屋をやっていたことがあるんだそうですね」

「何だと？」

「薬種屋ならどんな毒薬でも手に入るでしょう」

「誰がそんな事を言った」

「番頭の茂助爺さんですよ。あの親爺そろばんは算盤の事しか知らないのかと思うと、四十年も人の飯を食っただけに、なかなか気の付くところがありますよ」

「フーム」

「親分がまた腕を組んだ、この双六すごろくも上がりに近いぜ。ね、お静さん——おっとあねごと姐御、この秋は少し遠っ走りして、湯治とうじにでも行こうじゃありませんか」

ガラッ八はそう言って、晩の支度にいそいそと立ち働くお静の美しい後姿を見るのでした。

全く、このガラッ八の予言も見事に当たりました。

翌る日の朝、越後屋から急の迎え。

「旦那が殺されて、新助どんが深傷ふかでを負わされました。すぐ親分に——」

と言う使いの口上を半分も言わせず、平次は妻楊子つまようじを叩き付けるように、ガラッ八うながを促して、横山町へ駆け付けました。

越後屋へ行って見ると、全く文字通り上を下への騒動です。

「親分、た、大変なことになりました」

飛んで出たのは、少し狸たぬきに似た老番頭の茂助。

「飛んだ事だね、番頭さん」

平次は言い残して奥へ入りました。

薄暗い仏壇の奥、独り者の主人が昼でも時々は籠^{こも}っている八畳の間には、床から抜け出したままの佐兵衛、血の海の中にこと切れております。

傍には弟の民五郎、妙にウロウロして、何事も手の付かぬ様子で平次を迎えましたが、さすがに落ち着きを見せる積りか、血飛沫^{ちしぶき}の中に、おののく膝を突いて、

「親分、御苦労様で」

そんな事を言っております。

平次は黙って会釈して、念入りにその辺を見廻しました。曲者は雨戸を外して入ったらしく、縁側には泥足の跡などを付けておりますが、部屋の中には別にそんなものはなく、主人の佐兵衛は熟睡^{じゆくすい}しているところを、虫のように刺されたらしく、少し乗出し加減^{こくう}に虚空を掴んでおりますが、深々と咽笛をえぐった傷の様子では、声をも立てずに死んだ様子です。

「恐ろしい腕前だ」

平次は思わずガラッ八を振り返りました。寝ている者の首が、半分千切れるほど切るのは、非凡^{わび}の業か腕力がなければなりません。

曲者の遺留品というのは、蠟塗^{ろうぬり}の脇差の鞘^{さや}が一本だけ。

「この鞘に見覚えはありますか」

誰へともなく平次が言うと、

「へエ、そ、それは私の品で——中味は隣の部屋にあります」

待ち構えたように民五郎が言います。

次の間は深傷^{ふかで}を負わされた新助が寝ている、納戸兼用の六畳です。^{なんど}

一足入ると、ここは更に惨憺^{さんたん}たる有様です。かなり取乱した中に床を敷いて、町内の外科が、新助の傷の手当をしているところへ、

「災難だったね、番頭さん」

平次は声を掛けます。

「へエ——、私はよろしゅう御座いますが、旦那がお気の毒で、何しろ昼^{つか}の疲れですっかり寝込んでいるところをやられたんですから」

新助はおどおどした顔を挙げました。

「曲者の顔を見なかったのかい」

「今申上げた通り、何かに驚いて、ハッと飛起きると、行燈あんどんは消えて真っ暗でしょう、——旦那、旦那——と声を掛けるといきなり後ろからバサリとやられたんで——」

「それから」

「恥かしいことですが、それっきり眼を廻してしまいました。呼び起されて見るとこの有様で、へエ——、何とも申訳御座いません」

「謝らあやまなくたっていい、——ところで、その主人を呼んだ時隣の部屋あかりに灯が点いていたのかい」

「点いておりました、へエ」

「疲れつかちゃ悪い、横になった方がいいだろう。全く災難だったね」

平次は新助の後ろへ廻って、外科の手当をしている傷を見せて貰いました。

右の肩下から、五寸ばかり定規じょうぎで引いたように斬り下げた刀創かたなきずは、さまで深いものではありませんが、血の出ようがひどいようですから、随分気の弱い者は眼位は廻すでしょう。新助は長年の米屋奉公きたで鍛えて、身体こそ立派ですが、人間は少し不愛想で、何となく臆病おくびょうらしいところさえあります。

「これが曲者の捨てて行った脇差かい」

「へエ」

平次は血刀を取上げて縁側へ出ました。朝の光りにすかして、切っ先から柄つか、目貫めぬきまで、丁寧に調べておりましたが、何を考えたか、風呂敷を借りてそれを包むと、

「この脇差はちょっと借りて行くぜ」

そう言って、今度は念入りに部屋の中を捜し始めました。

押人たんすの中、箆たんすの上、脱ぎ捨てた着物、一つも平次の目を脱れるものはありません。それが済むと、縁側へ出て、便所ちようずばの手水場の下をツクツク眺めております。曲者が何か洗ったものか、そこの植込みや砂利は、ほんの少しですが、薄くなった血が流れています。

「親分、見当は？」

ガラッ八は心配そうに後から尾ついて来ました。

「まるわかっきり解らないよ」

「へエ——」

「この家から人間を一人も出さないように手配してくれ。俺はちょっと出て来る。それから新助はなるべく一人でそっとして置く方がいいぜ、手負いは気が立っちゃ悪い」

「どこへ行きなさるんで——」

ガラッ八は追っかけて訊きました。

「まだ飯も食わないじゃないか」

「あっしだって食いませんよ」

「我慢しな」

平次は風呂敷に包んだ脇差を小脇こわきにフラリと外へ出ました。

八

その後へやって来たのは三輪の万七とお神楽かぐらの清吉でした。

平次がやったと同じような探索たんさくをして、一度門口へ出ましたが、思い直したように取って返すと、支配人の民五郎に縄を打って引立てます。

「八五郎あにい兄哥、念のために言って置くがネ、これだけ証拠ほしの揃った犯人を、平次親分がなぜ挙げなかったんだ。後で縄張りがどうのこうのと言わないことだぜ」

万七は冷たい言葉を浴びせると、ガラッ八を尻目に弥次馬の群がる中を、腰縄を打った民五郎を追っ立てて八丁堀へ引揚げるのでした。

吟味与力の笹野新三郎は、その時丁度平次と話し込んでおりました。

「万七が越後屋の支配人を縛って参りました」

取次がそう言うと、



「何、万七が？ ——兎に角庭へ廻せ」

その声を聞くと万七は、待ってたと言わぬばかりの顔を縁側へ出しました。

「旦那様、平次から御聞きで御座いましょう。越後屋の主人を殺し、手代に深傷を負ふかでおわせた、支配人民五郎を挙げて参りました。浅草で編笠乞食あみがさこじきの弥三郎を毒害したのも、此奴こいつの仕業しわざで御座います」

「フーム」

笹野新三郎が顔を挙げると、庭へはもう、お神楽の清吉が、民五郎を引据えております。

「兄哥、とうとう民五郎を挙げたね」

同じく縁側へ滑った平次は、天を仰いで歎息するようにこう言いました。

「それが悪いのか、銭形の、——弥三郎殺しを新助の仕業と思ったのは俺の鑑識めがね違いだったが、今度ばかりは外れはずっこのねえ証拠がある」

万七は少しいきり立ちます。

「二人共、静かにせぬか、——万七、何よりその証拠と言うのを聞こうか」

笹野新三郎は二人の争いをなだめてこう言います。

「申しますとも、第一に主人の佐兵衛と、養子分の新助を殺せば、あの身代は民五郎の自由になります。佐兵衛を斬ったのは、かなりの腕前ですが、民五郎は若い時なららず者の仲間まじに交って、腕も少しは出来るって言います。それから上方で薬屋をやった事もあるそうですから、弥三郎を殺した恐ろしい毒薬を持っていた筈です」

「——」

「それに、曲者は外から入ったように見せてありますが、縁側の泥足は、すぐその下くつぬぎの沓脱にあった下駄でつけたもので、柔かい庭土の上には足跡もありません。曲者は内の者に決っております」

——随分へまな証拠を拵えたんだネ——平次はそう言おうとして口を緘つぐみました。万七と争ったところで仕様がなかったのでしょう。万七はしかし委細いさい構わず続けました。

「新助は怪しいが、自分であれだけの傷を背中へつけられるわけではなく、番頭は年寄で荒っぽい事の出来る柄ではありません。もう一つ、動きの取れない証拠は、主人と新助を斬った脇差はこの民五郎のもので、中味は銭形のが持っている筈で御座いま

す」

万七の言葉には淀^{よど}みもありませんでした。

「それは非道だ。私は人を殺すような人間じゃありません。まして自分の兄を手にかけるなんて、聞いても恐ろしい——」

民五郎はあまりの事に転倒して、縛られたまま身を揉みますが、縄尻^{なわじり}を押えたお神楽の清吉は、グイグイと引いて大地に押付けております。

九

「銭形の、民五郎が下手人でなきゃア、誰が殺したんだ。縄張^{なわばり}は縄張、物の道理は物の道理だぜ——。わざわざ笹野の旦那をおつれして、見事俺に恥を搔かせる積りだろうが、そんなわけにゆくものか」

万七はしきりといきり立っております。

「そんな訳じゃないよ、三輪の、口で言っても解らない事があっちゃ、人間一人の命にかかわるから、旦那^{はじ}を始め皆んなの目で見て貰おうというんだ」

平次はそれを宥^{なだ}めながら、横山町の越後屋の店から入って行きました。人殺しの現場へ、吟味と力を引張り出すということは、なかなか容易ならぬことでもあったのですが、新三郎は思^しう仔細^{さいし}があるのか、黙って平次について行きました。それを迎えたガラッ八は、不思議な事の成行に、大きな口を開いて挨拶するのさえ忘れております。

惨憺^{さんたん}たる中を一通り見て廻った後で、平次は笹野新三郎と万七を縁側^{さそ}に誘い出しました。

「この手水鉢^{ちょうずばち}の下の植込みと、白い砂利が血に洗われております。これは曲者が主人を斬った後で脇差^{わきざし}の刃を洗ったのでございます。脇差^{つか}の柄^{さなだひも}の真田紐が少し濡れておりますから、間違いは御座いません、——人を一人斬って、二人目を斬る前に、刀を洗うのは、並大抵の曲者にしては悠長過ぎはしませんでしょうか」

平次は重大な謎を投げかけました。それを解けるのが、——いつぞや平次が女房のお静^{ひげ}に髭を剃らせているのを見た、ガラッ八だけかもわかりません。

「——それからこの柱を御覧下さい、かなりひどく血が付いておりますが、これは手

や着物から付いたのではなくて、傷口から飛沫しぶいたのです」

「——」

「主人の死体からも新助からも、遠い、この柱のこっこの側に血が飛沫く筈はありません。それに、新助は先刻、曲者に斬られた時主人の部屋の灯あかりが見えていた——と言っていました。ここで斬られて、後ろの灯が見える道理があるでしょうか、新助は斬られてすぐ目を廻しているのです御座います」

「それでは下手人は誰だ」

笹野新三郎、たまり兼ねて言いました。

「お待ち下さいまし、この柱にこう脇差の柄つかを縛って——」

平次はそう言いながら、自分の持っている風呂敷を解き、中から血だらけな脇差を出して、その柄を風呂敷で柱に縛り付けながら続けました。

「こう三尺五六寸のところへ脇差を縛り、刃を下へ向けて、切っ先に肩先を当て、スーッと上へ起ち上がると、人間の身体が背後うしろから斬り下げられたように真っ直ぐに下へ傷が付きます。新助の背中の傷は、定規じょうぎで引いたように真っ直ぐに斬り下げてありますが、人間の手で斬ったんでは、あんなに行くものでは御座いません」

そこまで聞くと、半身を白布で巻いて、ウンウン唸っていた新助は、いきなり起上がって這出そうとしました。

「八、その野郎つかまを捕えろ。臥ねている人間の首を半分斬落した恐ろしい力だぞ、手負いだと思って油断するな」

「何をッ」

猛烈な取っ組み合いが始まりました。

平次が手を貸さなかったら、本当にガラッ八もどんな目に逢わされたか知れません。

「新助、まだ逃げるには早いぞ、もう少し聞かせることがある。この脇差の柄つかを縛った前垂まえだれをどこへ隠した。先刻まで、少し血が付いているのに気が付かずに、そこへ放って置いたろう、——俺はそれを隠させる積りでここを明けてやったんだ。俺が脇差の柄つかに糠ぬかの付いてるのを眺めてみると、手前は急に糠だらけの前掛てめえを気にしていたじゃないか」

「——」

新助はすっかり恐入ると急に背中^の傷が痛み出したらしく、縛られたまま畳の上へ崩折くずおれました。

三輪の万七とお神楽の清吉は、何時の間^に帰ったか、もうその辺にはいません。

「恐れ入ったね、親分、三輪の万七とお神楽の清吉がコソコソ逃げ出した恰好はなかったぜ」

「馬鹿ッ、つまらないことをいうな。俺は人を縛ると後の気持がよくねえ、——だが、あの野郎は助けるわけに行かなかったよ。もっとも、あれほどの悪党でも、主人の血の着いた脇差で自分を切る気がなかったのは不思議さ、余っ程、気味が悪かったんだね。それでとうとう露顕ろけんしたのも因縁いんねんだろう」

平次はそう言いながらガラッ八うながを促して家路に向いました。

言うまでもなく新助は越後屋を乗取って、お絹を手に入れる積りだったのです。弥三郎を殺した毒薬は、民五郎が物好きで持っていたのを、用筆筒ようだんすから盗み出したもの、これはお白洲しらすで判りました。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵一萩 柚月©2017

初出―「オール讀物」昭和八年十一月号 文藝春秋社

底本―「銭形平次捕物全集」第一巻 河出書房 昭和三十一年五月五日初版

編集・発行 銭形倶楽部 <http://www.zenigata.club/>

銭形倶楽部では本編の縦書き PDF ファイルもダウンロードできます。